

# 韓国における選挙運動組織の形成と集票構造

春木育美

(立教大学)

## はじめに

韓国において政治家志望者はいかにして選挙運動組織を形成し、どのような資源を動員して集票活動を行うのであろうか。

本稿は第 16 回国会議員選挙における首都圏の与党候補者の選挙運動を、参与観察に基づき考察した事例研究である。事例の対象となったのは、ソウル市広津区乙の民主党女性候補、秋美愛（チュ・ミエ）である。女性候補を選んだ理由は、これまで政治学の分野において等閑視<sup>(1)</sup>されてきたジェンダーの視座を導入し、政治的マイノリティである女性候補がいかなる資源を武器にするのか考察するためである。

秋美愛を選定した理由は、第 1 に、全国区ではなく地域区（小選挙区）公認候補であり、かつ再選可能性の高い候補者であったためである。韓国では現職議員の再選率が低いため<sup>(2)</sup>、1 回の当選で消えていく議員よりも、再選を成し遂げる候補の選挙運動を分析することが、集票組織や支持基盤の形成と拡大をより詳細に分析する上で意義があると判断した。

第 2 に、ソウルを選挙区とする候補者であったためである。民主化以降、有権者の投票行動を最も規定してきたのは地域感情であったといえる。特定の政党が強い支持基盤を有する地方の選挙区では、その党の候補者が当選者の圧倒的多数を占めてきた。これに対し、ソウルを中心とする首都圏では、ごく一部を除き特定の政党候補が当選を確実にする選挙区は見当たらない。首都圏には大量の人口流入にともない各地域の出身者が居住し、地域共同体も多元化している。そのため集票組織の形成にあたり、地域感情<sup>(3)</sup>のみならず、多様な関係資源の動員が必要とされる度合いが相対的に

高いと思われる。

第 3 に、秋美愛が元判事という職業的属性を持つためである。韓国において法曹界は候補者の主要供給源となってきた。例えば、第 15 回国会議員選挙に出馬した候補者の職業別比率をみると、政治家・政党員が最も高く、続いて実業家、法曹、言論、官僚の順であった<sup>(4)</sup>。

第 4 に、秋美愛が慶尚道出身者であるためである。これまでの選挙研究において、地縁は同じ地域の出身者から高い支持を受けるという意味で使われてきた。国会議員選挙においても、地域区選出議員の出身地と選挙区との関連は非常に高い（服部 1992：236）。しかし、秋美愛の事例では、全羅道を主要な支持基盤とする民主党の候補でありながら、秋美愛自身は慶尚道出身者であった<sup>(5)</sup>。それにもかかわらず、秋美愛の選挙運動の中核となったのは、慶尚道出身者ではなく全羅道出身者であり、地縁のねじれともいべき現象がみられた。いかにして慶尚道出身の秋美愛が全羅道者出身者の支持を組織化したのかを明らかにすることは、従来の地縁という枠組みの再検討につながると考えられる。

本研究では秋美愛の事例から、まず、ソウルを選挙区とする一民主党候補者がどのような政治資源を用いて選挙運動を組織し、誰が実際の選挙運動を担い票を集めているのかという集票のメカニズムを、候補者の側から考察する。次に、秋美愛の事例において、地域感情がいかなる形で選挙運動過程に影響を及ぼしたのかを考察し、選挙における地縁の意味を検討する。

本事例は、全羅道に支持基盤を置く、地域党ともいるべき民主党の候補者が、いかにして選挙運動を組織化し集票活動を行ったのか、また、そこに地域感情がどのように作用したかについての限

定された分析となる。秋美愛は知名度だけで当選できる候補者ではない。多種多様な背景を持つ選挙区民が混在するソウルの選挙区で、人的ネットワークを最大限に活用し集票を行い、選挙戦に勝利している。民主化以降の韓国の選挙において最も規定力を持ったのが地域感情である以上、その枠組みの中で選挙運動を行う秋美愛の事例から、韓国の選挙の特質の一端が浮き彫りになると思われる。

本研究の事例から明らかになった知見を一般化するには限界があることは否定できない。しかし、特定地域に支持基盤を置く政党の公認候補者の場合、党の支持基盤となっている地域出身者の支持を獲得、組織化し集票を行うという構図には一定の共通点がみられるといえる。地域政党システムの下で行われる主要政党候補者の典型的な選挙運動モデルは、所属政党の支持基盤地域の出身者の票固めを行い、そこに独自の人的資源を活用し支持勢力を拡大し、その票を上積みし選挙戦に勝利するというものであろう。この構図は秋美愛の事例でも同様にみられた。しかし、前述したような地縁のねじれの中で、いかに集票組織を形成したかを明らかにすることが本研究の主眼といえる。

事例研究にあたり、2000年4月13日の第16回国議員選挙を射程に、1999年6月の予備調査を経て、2000年2月10日から4月16日まで秋美愛候補の選挙運動過程の参与観察を行った。また、その後も2001年3月と2001年9月、2002年3月に再度現地調査を行い、秋美愛議員および地区党員たちの日常的な政治活動を考察した。並行して同期間に同じ選挙区から出馬した柳俊相ハンナラ党候補、広津区甲の金榮春ハンナラ党候補、東大門甲の金希宣民主党候補、京畿道高陽市一山区甲の鄭範九民主党候補に関する現地調査を行い、分析に加えた。

## 1. 候補者および選挙区の概要

秋美愛は1958年に大邱広域市達城郡で出生し、慶北女子高校、漢陽大学を卒業し判事となつた。春川地方裁判所を皮切りに、仁川地方裁判所、全州地方裁判所を経て光州高等裁判所に勤務してい

た1995年に、金大中国民会議総裁（当時）から入党を要請され政界入りした。当時国民会議は、地域党から脱し全国政党化することを標榜し、慶尚道出身者をはじめ各地域、各層からの候補者リクルートに乗り出していた。当初乗り気でなかつた秋美愛の入党を後押ししたのは、全羅北道井邑出身の夫、徐盛煥とその家族であった<sup>(6)</sup>。その後、1996年に実施された第15回国議員選挙に広津区乙から出馬し、初当選を果たした。

広津区は、庶民層の多く住む住宅密集地である。商業地域は発展しているが、準工業地域は広津区全体の0.3%にすぎない。事業所数でみると、最も多いのは小売業・修理店、続いて宿泊業・飲食業である（広津区『広津区統計年報』1999）。秋美愛の選挙区である広津区乙は、相対的に全羅道出身者の多い地域<sup>(7)</sup>ではあったが、全羅道出身者の票だけではソウルの選挙区での当選を確実にすることは難しい<sup>(8)</sup>。

## 2. 選挙運動の組織化

選挙法という制度的な制約は、運動の組織化戦略を拘束する。そのため、いかに選挙法違反とならない形で選挙運動を組織化するかが重要となる。2000年4月13日に実施された第16回国議員選挙の法定選挙運動期間は、17日間である。公職選挙および選挙不正防止法は、選挙期間中の入党勧誘、国会議員や地方議會議員による議政活動報告会、団体または団体の名義で特定政党や候補者の支持、反対、またはそれらを促す行為<sup>(9)</sup>、選挙に影響を及ぼすこと目的とする親睦会や集会、郷民会、野遊会、宗親会または同窓会、特別な事由のない班常会などの開催を禁止している。また、投票日の30日前から投票日当日までは、党员集会や党员研修、党员教育を実施することはできない。

秋美愛陣営は、1999年10月頃から選挙対策会議を開き、中核となる運動員の獲得と組織づくりに乗り出した。実質的に選挙運動組織の中核を担つたのは、地区党委員長、副委員長、事務局長（広津区乙地区党の場合、広報部長兼任）、顧問、女性部長、青年部長、企画部長、各洞協議会長、

市議会議員、区議会議員であった。ここに複数の党幹部が加わり、後述するように、同心円を描くが如く集票組織を拡張していった。

候補者の集票組織の核となったのは地区党（党地方支部）であり、それを中心として重層的に集票組織が形成されていく。典型的な選挙組織は、候補者をトップに選挙対策本部が置かれ、副委員長、顧問、事務局長、各種職能団体、総務部長、組織部長、女性部長、青年部長、広報部長、洞協議会長らで構成され、候補者によっては洞協議会単位別に青年会長、女性会長などの幹部を配置する（チョン・ヨングク 2003：83-84）というものである。ただ、秋美愛の事例にみると、組織体系や規模、役職名は候補者により違いがみられる。

候補者が行う典型的な事前選挙運動として挙げられるのは、まず、入党申請書（以下入党書）の確保である。法定選挙運動期間中の入党勧誘は違法となるため、秋美愛陣営では年明け早々から「党員倍増運動」という名目で入党書集めに奔走した。

入党書を集める理由は、第1に、地域住民に関する詳細な個人データを作成するためである。第2に、候補者に関する広報活動を行うためである。法定選挙運動期間を除き、党員以外の人に候補者に関する広報物を送付することは選挙法違反となる。ゆえに、事前選挙運動を含む平素の広報活動を行うためには、党員は多ければ多いほどよい。第3に、入党書への記入を通して、候補者の知名度を上げるとともに、党員に候補者に関する広報活動をさせるためである。第4に、党員たちの競争心を高めるためである。入党書は、必ず誰が持ってきたものを名簿に明記しておく。入党書の確保数が少ない党員は、熱心に活動をしないと地区党内で風評が立つことになり、また、多くの入党書を確保した者は、地区党で一目置かれる存在になる。入党申請書の数を競わせることは、候補者にとり、地区党幹部の能力や意欲を試す手段ともなる。

次に、党員教育である。党員教育とは、党員を対象に候補者が政治信条や地域の問題点やその解決策などを話すものである。現職議員であれば議

会活動や地元への貢献内容などに関する広報活動が中心となる。実際には参加者は党員とは限らない。その場で入党申請書を書けば選挙法違反とはならないため、党員教育にどれだけ地域の選挙民を動員できるかが重要になる。年明けから地区別に計20回の党員教育を開始した秋美愛は、この期間に800名近くの有権者と接触の機会を得た。

現職の議員が候補者の場合は、議政（国政）報告会が事前運動として重視される。議政報告会は、候補者の人物像や選挙区への貢献度を宣伝する場であり、また集票組織に誰を取り込んだかアピールするよい機会となる。議政報告会では毎回必ず来賓紹介がなされる。それにより、誰が候補者に選挙協力しているのか明示される。議政報告会に誰が来ていたという情報は、瞬く間に地域に広がる。そのため、地域の名望家や団体幹部をできるだけ多く動員しようと、候補者をはじめ傘下の地方議員（市議や区議）、地区党幹部たちはフル稼働する。秋美愛は、2月下旬から3月中旬にかけて、地域の有権者を対象に計9回の議政報告会を催し、毎回300～400名が参加した。

### 3. 集票組織の形成

次に、実際に中核運動員たちが、いかに資源を動員し、集票組織を形成していくかをみる。運動員の属性は、表1にみると、職業的には大半が自営業を営む男性で平均年齢は52歳である。出身地は6割が全羅道である。

次にそれぞれの運動員がいかにして資源を動員し集票組織を形成していくかを、（1）地区党常勤職員、（2）副委員長・企画部長、（3）洞協議会長、（4）女性部長・青年部長、（5）地方議員に区分し検討する。

#### （1）地区党常勤職員

広津区乙地区党の常勤職員は、事務局長のA、顧問のC、事務の女性の3人である。Aは両親の出身地である黄海道で生まれたが、幼少期に広津区に移り住み、地域の特性や人間関係に精通していた。さらに野党の大統領候補や国会議員の選挙運動員として働いてきたAは選挙運動のノウハウ

表1 秋美愛の選挙運動組織における中核運動員

肩書き	名前	出身地	職業	備考
事務局長(広報部長兼務)	A	黃海道	地区党事務局長	男性
副委員長	B	全羅道	不動産業	夫の叔父
顧問	C	全羅道	政党員	男性
市議	崔鍾徳	全羅道	政党員	男性
市議	金泰潤	全羅道	弁護士	男性
区議(九宜1洞)	崔今孫	忠清道	飲食店経営	男性
区議(九宜3洞)	金善甲	京畿道	政党員	男性
区議(紫陽1洞)	李昌妃	忠清道	建築業	女性
区議(紫陽2洞)	崔東珉	忠清道	建築業	男性
区議(老遊1洞)	趙吉行	全羅道	宿泊業	男性
区議(老遊2洞)	羅宗漢	忠清道	建築業	男性
洞協議会長(九宜一洞)	D	全羅道	内装業	男性
洞協議会長(九宜三洞)	E	全羅道	飲食業	男性
洞協議会長(紫陽1洞)	F	全羅道	飲食業	男性
洞協議会長(紫陽2洞)	G	全羅道	電気工事請負業	男性
洞協議会長(紫陽3洞)	H	全羅道	自動車整備業	男性
洞協議会長(老遊1洞)	I	慶尚道	旅館経営	男性
洞協議会長(老遊2洞)	J	全羅道	飲食業	男性
洞協議会長(華陽洞)	K	全羅道	不動産屋	男性
青年部長	L	江原道	不動産屋	男性
女性部長	M	全羅道	カラオケ店経営	女性
企画部長	徐盛煥	全羅道	弁護士	秋美愛の夫

ウに通じたベテラン運動員であり、しかも軍事政権下から一貫して野党候補を支持してきた百戦錬磨の人物であった。Aの経歴を知った地区党副委員長のBは、事業が行き詰まっていたAに地区党常勤職を提示し、秋美愛陣営に取り込むことに成功した。Aは相対的に地域色が希薄で有力な地縁を持たなかったことから異なる地域出身者間の利害の調整に長け、党员の不満や要望を巧みに処理した。

Cは、全羅南道寶城出身で、長年にわたり一貫して金大中が率いる政党のために働いてきた。第15回国會議員選挙では、秋美愛に選挙運動のノウハウを指南した。Cは全羅道出身者の間では湖南郷友会の顧問を務めるなど長老的存在となっていた。対立候補のハンナラ党的柳俊相はCと同じ寶城出身であった。柳俊相は広津区乙に住む寶城出身者に対して、同郷者である自分の選挙運動

への協力を訴え、寶城出身者の大部分は、C顧問の顔を立てて、多くが秋美愛陣営についたという<sup>(10)</sup>。また、海外ベトナム参戦戦友会の役員でもあるCは、秋美愛を戦友会の顧問にすることで、ベトナム参戦戦友会会員を集票組織に取り込んだ。

Cは地区党幹部の中でも70代と最高齢であり、野党活動経験も最も長かった。Cの一言で地区党内のいきかいで治まるなど、長幼の序意識が地区党内の秩序形成に大きく寄与した。

運動の組織化には、資源を動員する者だけがいれば成り立つものではない。AやCのように、動員された資源を管理、維持する役割を果たす人物の存在が非常に重要であるといえる。

## (2) 副委員長・企画部長

広津区で不動産業を営んでいる地区党副委員長のBは、秋美愛の夫の叔父にあたる。公認決定後、Bは事務所の手配、地域の情報収集、組織づくりに奔走した。また、姉（秋美愛の姑）や自分が円仏教の信者であったことから、地域の円仏宗教団を説得し、秋美愛への支持をとりつけるなど独自の資源を開拓した。秋美愛の配偶者である徐盛煥は、全羅北道にある自分の弁護士事務所を休業し、広報物の作成や選挙運動戦術の策定などをを行い、また、選挙運動資金を管理した。

第14回国會議員選挙における候補者の選挙運

動を調査したチョン・ヨングクとイ・ウォンウンによれば、与野党にかかわらず、地区区の候補者は公的な選挙組織を構成するにあたり、親戚や姻戚などの血縁や学縁などの個人的縁故に基づいて組織構成員をリクルートすると指摘している（チョン・ヨングク 1992；イ・ウォンウン 1992）。秋美愛の事例では、学縁は秘書陣のリクルートに動員された程度であった。夫の徐盛煥は自分の高校や大学の同窓生に呼びかけ、秋美愛の選挙協力をを行う人材を個別にリクルートし、選挙戦術の立案や選挙公報物やポスター企画に携わる企画部員として活用した。

ムン・ソンナムが行った学縁、地縁、血縁に関する意識調査によれば、同窓会に参加する比率は、男性は 53.2%、女性は 29% であり、男性は女性より 2 倍近く高い。同窓関係が社会生活の助けになるという回答は、女性（39.8%）よりも男性（58.2%）のほうが高かった（ムン・ソンナム 1990）。血縁、地縁、同窓関係の選挙運動への活用という点に関しては、秋美愛は男性候補よりも不利な点に置かれているといえる。しかし、配偶者である夫が同窓関係を動員することで、その欠落を補完した<sup>(11)</sup>。

### （3）青年部長、女性部長

#### ①青年部長

青年部長に任命された L は江原道出身の不動産業者である。L はこれまで多様な社会活動経験から得た人的資源を秋美愛の選挙運動組織に丸ごと投入し、若手の男性運動員の確保に貢献した。将来的に市議になりたいという政治的野心を持つ L は、第 15 回国會議員選挙で秋美愛が当選すると、すぐさま地区党を訪ねていき、支持者となつた。秋美愛を選んだのは、現職の国會議員であることとともに、秋美愛の出身地が慶尚道であり全羅道ではなかったためである。全羅道出身の国會議員であれば、全羅道出身者が要職を占める地区党内で、江原道出身の L は、党内で信頼や要職を得ることは難しい。しかし、非全羅道出身者の秋美愛であれば自分にもチャンスがあると考えたという<sup>(12)</sup>。

L は自分の政治的力量や存在意義をアピールす

るよい機会となると考え、1999 年 12 月末に広津区乙地区党青年部を結成した。L は、それまでに築いた人的資源を動員し、瞬く間に 100 人近い会員を集めた。その大半は、L が不動産仲介業を営んでいる大型総合ショッピングセンター「テクノマート」で働く従業員であった。L は、「テクノマート」商友会の幹事や事務総長などを歴任しており、商友会会員の従業員を容易に組織化することができた。また、商友会の次期会長選に立候補することを宣言していた L にとって、商友会会員を青年部の形で組織化し親密な関係をつくっておくのは重要な選挙対策ともなった。会員たちにとっても次期会長の可能性の高い L と親密な関係を形成しておくのは得策であった。こうして双方の利害が一致する形で、テクノマートで働く若手の従業員たちが青年部の一員となった。

#### ②女性部長

女性部長の主な役割は、地域内の各種の女性団体やアパート婦女人会などの互助組織などに接触し、支持を訴えることである。また、女性団体の会合や契（頼母子講の一種）の集まりなどの日時を把握し、候補者との座談会や候補者が成員たちに挨拶する場を設定したりする。候補者が男性の場合は、候補者夫人の選挙運動をサポートする役割も担う。平素から地域の世情や、地域でさまざまな活動をしている女性たちの出身地や政治性向を把握しておくことも重要な任務である。そのため女性部長には、社交的で幅広い人的ネットワークを持つ者が選ばれることが多い。

女性部長となった M は全羅北道全州出身である。M を推薦したのは紫陽洞湖南郷友会の会長である。10 年前に広津区に移り住みカラオケボックスを経営してきた M は、地域の郷友会や山岳会、生活体育同好会、子母会、オモニ会などを通じて地域に多様な人間関係を培ってきており、手帳には約 400 名の地域住民の連絡先が記されていた。地区割りで結成されている山岳会や生活体育同好会（早起き体育会）には、多種多様な地域住民が参加しているが、M はそれらの団体で長年世話役として活動していた。規模の大きい山岳会の場合、会員数は数百人に達し、休日ともなる

と貸し切りバス数台を連ねて登山に向かう。候補者にとって有権者との親密な接触が最も容易なのがこの山岳会である。秋美愛もまた多数の山岳会に名前を連ね、こまめに挨拶回りをした。候補者の中には自ら山岳会を結成する者も少なくない。登山を通じて会員との結束を強め、選挙時に会員たちを集票組織にまとめて組み込む目的で結成されるのである<sup>(13)</sup>。

また、サッカー、テニス、バトミントンなどの生活体育同好会の練習や試合の日程に合わせ挨拶回りすることは、候補者にとって欠かせぬ選挙運動となる。その媒介をするのがMのような運動員である。その他にもMは、自分の顔のきくオモニ会や子母会などさまざまな母親団体の会合に秋美愛を同行し挨拶させるなど、票集めに尽力した。

Mにとって大きな転機となったのは、民主党主催の「全国地区党女性部長研修」に参加したことであった。全国の地区党の女性部長らと、「このまま使われるだけで終わるのではなく、条件さえ整えば自分にも機会が回ってくる。この経験やノウハウを生かし今度は自分たちが議員になるのだ」という目標を共有するようになり、候補者への選挙協力がのちに自分の票田になると想えると一層熱が入るという<sup>(14)</sup>。

正式な女性部長はMであったが、秋美愛は内々に、九宜洞地域にもう一人の女性部長を任命した。九宜洞は高層アパート団地地域であり、選挙区の中で最も生活水準が高く、また、全羅道出身者の居住率が最も低い地域でもあった。そのため高層アパート地域では全羅道出身ではない運動員に集票活動を行わせる必要があり、秋美愛は現代アパート婦女会の副会長で慶尚南道釜山出身のPを特別女性部長としてリクルートした。

Pを紹介したのは、九宜洞区議の金善甲であった。高層アパートの婦女会は地域の環境整備などをめぐり、行政機関や政治家に接触する機会が多い。Pと金善甲も日頃から親しい関係にあった。また、Pは以前に新韓国党の選挙に関わっていたが、貢献度が認められない、女だから軽じられたと日頃から不満を漏らしていた。金善甲がPに目をつけたのはそのためでもあった。

女性部長職に就いたPは、自分と同じような不満を持つ運動員たちを引き抜くことから始めた。説得にあたっては、秋美愛が与党の国会議員であり、女性候補であることを強調した。Pは、これまでの選挙運動経験で培ってきた人的資源を秋美愛の選挙組織に転用したのである。次に、地域で評判の女性たちに接近し、候補者の長所をそれとなく話し、相手が自分の話に興味を示せば候補者との座談会の場を設定した。選挙運動への協力意思を示した場合には、○○アパート責任者など、何らかの肩書きを与え活動を促した。女性運動員にとり、選挙運動は自分がこれまで築いてきた人的ネットワークが政治資源となっていることを発見する場となると同時に、自己の可能性を追求する場ともなり、運動自体が自己実現の一次的な達成となっている<sup>(15)</sup>。

このように秋美愛は、全羅道出身女性の票固めを行うとともに、高層アパート団地地域では、全羅道出身ではない女性運動員をリクルートし、役職を与えることで意欲を引き出し、集票にあらせた。

#### （4）洞協議会長

洞協議会長は、洞単位で形成される集票組織を統括する責任者である。大半は居住歴の長い、40代中盤から50代の自営業を営む男性である（チョン・ヨングク 2003:84）。洞協議会長には、統長や班長経験者が選ばれることが多い。統長や班長経験者が各種選挙の運動員として重用されるのは、統長や班長が、業務の性格上、日常的に地域住民に接することが多く、地域住民の属性や生活水準、支持政党を把握しやすい立場にあるからである。

秋美愛の陣営でも、8名の洞協議会長のうち5名は統長や班長経験者であった。民主化以前、与党候補は行政組織や官製団体を通じた動員に大きく依存し、野党候補は都市部の軍事政権に批判的な有権者による支持に依存していたのに対し、民主化後は与野党とも支持基盤地域を中心に政党の組織化に乗り出すようになり、主に地縁を軸とする集票構造が強化されてきた。また、民主化以前は主に与党の選挙運動に利用してきた統長や班

長、官製団体の役員・会員らが、与野党を問わず、自分の出身地域を支持基盤とする政党の運動員として活動するケースが増加した。これは与野党の票集めに、大きなちがいがみられなくなつたことを物語る。

洞協議会長が行う基礎的な作業は、担当地域の住民の家族構成、学歴、出身地域、支持政党を把握し地域の特性を分析することである。また、新住民の流入により、出身地域構成に変化があつたかどうかを把握する。それに基づき、担当地域における特定地域出身者の比率を割り出し、年齢や学歴、政治性向を勘案し票読みを行い、どれだけ浮動票があるかを計算する。次に居住地域に住む運動員と協力し、地域の有力者らに選挙協力を訴えて回るというものである。

秋美愛陣営では、8名の洞協議会長のうち、7名は全羅道出身者であり、老遊1洞協議会長となったIのみが慶尚道出身者であった。広津区乙地区党幹部のうち、唯一の慶尚道出身者もまたこのIであった。Iは老遊1洞選出の区議、趙吉行区議の集票活動を担った人物であり、趙吉行を当選させた功労者といわれていた。Iは老遊1洞で旅館を経営しており、広津区宿泊業協会の会長でもあった。趙吉行は、同業者であることから長く親交関係を結んできたIを説得し、秋美愛の選挙運動陣営に引き込んだ。Iが協力を決意したのは、候補者である秋美愛が全羅道出身ではなく、自分と同じ慶尚道出身者であったためという。慶尚道出身の候補者を応援するためなら、民主党候補であっても抵抗感がないというのである<sup>(16)</sup>。

老遊1洞はもともと全羅道出身者が多く、歴代選挙でも最も安定した票田であったため、当初Iの任命に対しては、党内で不満の声が聞かれた。しかし、結果的にIが、老遊1洞に居住する慶尚道出身者や、それまでハンナラ党支持者だった者たちからの入党書を大量に集めて集票組織に動員したことにより、集票に欠かせない人物と認知されるようになった。Iは、民主党を支持しない層は金大中に対する抵抗感が強いとみなし、秋美愛の人物像や改革手腕、慶尚道出身者の秋美愛が与党で活動する意義などを訴え説得にあたった<sup>(17)</sup>。

次に、洞協議会長Hが具体的にどのように集

票活動を行ったかみてみる。Hは、地域の山岳会を通じて親しい間柄にあった紫陽3洞忠清道郷友会会長に秋美愛への支持を訴えるとともに、議政報告会や党員教育に郷友会の会員を動員してくれるよう依頼した。郷友会会長は、紫陽洞に住む忠清道出身者の間では長老的存在であり信望が厚かった。会員たちは、同郷の年長者の頼みとあっては断りにくく、その家族たちも、長老の顔を立てるためと、地域の主婦仲間や知人を引き連れ、議政報告会や党員教育に参加した。このように日常の地縁的な結びつきが政治的動員に転化されることがある。この場合は候補者との直接的関係ではなく、候補者の支援者である選挙運動員との人的つながりから選挙運動に協力するケースである。

また、Hは、民防衛隊長としての権限を利用して、民防衛教育が行われるたび、地域から招集された予備役たちに秋美愛が挨拶をする席を幾度も設けた。

#### (5) 地方議員

地方議員候補者が政党に所属する場合、その政党がどの地域を支持基盤とする党であるか、与党であるか、出馬を希望する地域の地区党委員長がどのような背景を持つ人物であるかが党選択に影響を与えるといえる。入党に際し、その地区党で公認を受ける可能性があるかを考慮しなければならないのである。地方議員の中には選挙のたびに党籍を変更する者も少なくない。候補者と地方議員は互いに当選・再選という目的に基づく相互関係にあり、両者は常に利害を考え、ネットワークを乗り換えていくためである。このような勝ち馬に乗る動きは、国会議員のみならず地方議員にも顕著にみられる。

基礎自治体（区・郡議会）議員選挙を除き、政党は選挙区別に当選定数の範囲内で公認候補を擁立することができる。基礎自治体議員選挙の場合は、党公認候補の概念ではなく、立候補者はすべて無所属での出馬となる。しかし、実際には地区党による「内部公認」が行われる場合が多く、この内部公認の獲得をめぐり、立候補希望者は公認獲得競争を展開するようになる。

韓国の場合、地方自治の歴史が浅いこともあり、

選挙運動の専門家とよばれるようなノウハウを持つ者は決して多くない。候補者にとって、選挙経験の豊富な人材の確保は欠かせない。そのため地域に密着した選挙運動の可能な基礎議会議員（区議）を集票組織に組み込み活用しようとするのである。

秋美愛がいかにして地方議員の協力をとりつけ、その地方議員がどのように選挙運動過程において自己の持つ資源を動員したのか考察する。

#### ①市議

広津区乙（定数2）の市議はいずれも国民會議の議員である。第3選挙区の崔鍾徳市議は、長年金大中の選挙運動に関わってきた全羅道出身者であり、第4選挙区の金泰潤市議は、全羅南道出身の若い弁護士という理由で秋美愛が直接リクルートした人物である。しかし、ふたりの市議はそれぞれ健康上や仕事上の理由で、重要な行事や会合、戦略会議に出席するに止まり、活発な集票活動は行えなかった。

#### ②区議

区議の役割は市議以上に重要である。紫陽1洞区議の李昌妃を事例として、区議がいかに資源を動員し集票活動を行ったのか考察する。

忠清道出身の李昌妃は、建築業を営む実業家である。民主党の党員になったのは、秋美愛の当選後のことであり、それ以前は新韓国党に入りしていた。李昌妃はソウル市セマウル婦女人会会長を務めるなど、以前から官製団体や地域の婦人会で活動しており、地域の女性の間ではよく知られた人物であった。李昌妃は、セマウル婦女人会で培った人脈を生かし、自分の集票基盤でもある広津区セマウル婦女人会支部や地域の女性団体の幹部、会員らに秋美愛への支持を訴え、多くの入党書を集めめた。また、建築関係の取引先や下請け業者らに対し、与党候補への支持は商売上の保険となると説得し、民主党に入党させた。李昌妃は、特定政党への入党をためらう地域の主婦たちに対しては、自分の顔を立てて1回でいいから出席してくれと頼み、小集会の場を設定した。また、「契」などの集まりの情報を常時収集し、秋美愛に挨拶回り

をさせた。

また、広津区体育会理事会の顧問でもある李昌妃は、役員たちに秋美愛への選挙協力を依頼し支持をとりつけた。区長を会長とする広津区体育会の役員には、比較的社会的地位の高い者が就いており、彼らとの人脈は、李昌妃にとって、個人的な集票基盤としても重要なものであった。李昌妃の強みは、忠清道出身で、しかも区議という肩書きを持つことにより、多様な地域出身者や職業を持つ者と接触できるという点であった。地区党的女性運動員の大半は全羅道出身者であり、それが内部の女性同士の結束を高めていたが、結束の固さゆえに排他的な側面もあり、全羅道出身ではない者が地区党的活動や選挙運動に参加しにくい雰囲気を作り出していた。全羅道出身ではない女性を運動員として確保するために、女性部長のPや李昌妃の存在はきわめて重要なものであったといえる。

このように地方議員は個人的人脈を通して支持ネットワークを形成し、それを集票組織に転用していく。候補者は地方議員を通して、支持可能性の高い有権者と効率的に接触の機会を得られることがあるといえる。

### 4. 集票構造

中央選挙管理委員会が立候補者1,100名を対象に行った調査によれば、候補者は山岳会、郷友会、宗親会、同好会、同窓会などの874団体と直・間接的に関係を持ち、選挙運動に利用していた（『朝鮮日報』2000.2.16）。しかし、血縁、地縁、学縁に特徴づけられるそれぞれのネットワークの構成要素は、個々人により具体的な意味合い、ウェイトが異なるものと思われる。郷友会の選挙活用は、秋美愛の事例にみると、候補者自身との地縁に基づくものばかりではない。民主党候補の選挙運動の場合、地区割りで結成されている湖南郷友会が、集票組織の中核を担っているといえる<sup>(18)</sup>。しかし、彼らは候補者が自分たちと同じ全羅道出身の候補者であるという理由で支援しているのではない。金大中党総裁が公認した人物であるが故に支持し、選挙協力を行っているのであ

る。秋美愛の事例でいえば、民主党候補の秋美愛はいわば党総裁の代理人であり、他党（ハンナラ党）の候補者に打ち勝ち、自分たちの利益を維持するためのコマにすぎない存在なのである<sup>(19)</sup>。

地縁を媒介としない関係の場合、選挙のための一時的・短期的連合となる要素も内包し、運動員の支持政党や候補者の乗り換えもおこりやすくなる。大統領選挙のたびに勝ち馬に乗る動きが活発となり、当選した大統領の政党への地方政治家の党籍変更が増加するのがその例である。

また、学縁が集票や選挙運動に役立つかは、候補者の属性による。キム・グゥアンスの調査によれば、選挙区内にある中学や高校を卒業した候補者は、学縁は選挙運動に大きな力になると認識していたが、そうではない候補者の場合は、選挙運動員の中心的メンバーの選抜に学縁が活用されたにすぎなかった（キム・グゥアンス 1990：75）。つまり、学縁は直接的な得票要因としてあまり重視されていないが、選挙運動員の選抜には重視な要素となっている（キム・グゥアンス 1990：77）といえる。秋美愛の事例でも、学縁は、秘書の調達に活用された程度であり、自分の出身地から出馬した候補者でないこともあります、同窓生が集票活動に協力したり、政治資金を提供することはほとんどなかった。

宗親会などの血縁集団が集票組織として機能する場合は、国会議員選挙より大統領選挙の場合に、都市部よりは農村地域の選挙区の場合に、顕著にみられる<sup>(20)</sup>。例えば、第15回国会議員選挙で慶州乙区から無所属候補として出馬し当選した任鎮出は、集票活動において「慶州平澤任氏」の支援が大きな力となったと述べている<sup>(21)</sup>。秋美愛の事例では、宗親会（全州秋氏）は、集票活動に一切関与しなかった。郷友会、同窓会、宗親会への依存度は、地方の選挙区では強くみられても、首都圏の選挙区では他の要素がより重要になるといえる。

秋美愛の事例では、区議が集票組織の中核となり、集票活動において大きな力となった。民主化後の大きな変化は、地方議会の復活により、地方政治家という新しい政治的アクターが登場するようになったことである。地方自治制度の整備は、

権力へのアクセスを求める政治家志望者たちに、地方政治家への可能性という政治的機会構造をもたらしたといえる。また、国会議員候補者にとり、地方議会選挙が復活した1991年以降、地方議員の存在は、選挙運動において重要な要素となった。

とりわけ候補者にとり区議の支持をとりつけることが重要となるのは、区議の当落は地域主義的投票行動の影響が相対的に希薄であり、地域内で培った広範な人的ネットワークが支持基盤となっているからである。地縁ではカバーしきれない人的資源を集票組織に動員するためにも、区議は不可欠な存在といえる。

秋美愛と地方議員の関係は、選挙や日常の政治活動の上で、持ちつ持たれつの関係にあった。地方議員は国会議員選挙時には票集めに動き、選挙マシーンの役割を果たす。秋美愛は、地方議員からの陳情の実現のために尽力し、さらに公認（区議の場合は内部公認）獲得を後押しする意向を強く示唆する。その反対給付として地方議員の持つ人的ネットワークが動員され票が集められていく。秋美愛が地区党委員長として公認候補の決定に大きな影響を与えるとみなされていたことは、政治的野心を持つ者を集票組織に取り込み、その人物が持つ多様な人的資源を選挙運動組織に動員する誘因となった。秋美愛は、地方議員と地方議員志望者両者間の競争意識を煽ることで、集票活動を活性化させ、運動員を確保した。このように地方議員という新しい政治的アクターの登場は、選挙運動組織の性格を「連帯のシステム」から「利益のシステム」へと変容を促す要素となっている。

秋美愛は全羅道出身者には「金大中大統領が民族と国家のために尽くせるよう支えたい、そのため自分を国会に送ってほしい」と訴えた。その他の地域の出身者に対しては、自分がいかに中央省庁と強いつながりを持ち、選挙区への貢献度が高い政治家であるかを認識させようとした。女性有権者に対しては、自分も3人の子供を持つ母親であり、保育・教育施設や女性のための職業訓練施設の拡充に力を入れている点を強調した。

秋美愛が個別に接触した女性団体の中で、秋美愛に最も好意的であったのは、緑色オモニ（母親）会やオモニ合唱団、学校子母会やオモニ会の

メンバーたちであった。これは秋美愛が「女性候補」であることを前面に出すのではなく、同じ年頃の子供を持つ「母親」であることを政治資源として活用したためである。この事例は、同じ「女性」であることよりも、同じ「母親」であることが、女性有権者の親近感や共感を引き出すには効果的であったことを物語っている。

女性候補である秋美愛は軍隊経験を持つ男性候補と比べ、軍関連の結社との縁故が希薄である。そのため、民防衛隊長の H や、海外ベトナム参戦戦友会の役員の C など、軍隊ネットワークを持つ男性を媒介にして、その欠落を補完した。

秋美愛の事例では「仏教縁」を契機とする人的資源が支持基盤の拡大に大きな力となった。政治家志望者にとって、影響力のある宗教家との人的ネットワークは集票活動のために欠かせない。選挙区内の寺院や教会、聖堂などをうまく攻略することができれば大きな票田となる可能性が高いためである<sup>(22)</sup>。秋美愛は熱心な仏教徒であり、宗派は大韓佛教曹溪宗である。国民会議にリクルートされた頃から法会に欠かさず出席し、曹溪宗幹部との親交を深めてきた。また、地域内の寺院に定期的に通い信者と接した。信者は毎日曜日の法会や毎月開かれる引灯法会などの法会の他にも、地区割りの小グループを形成し、ボランティア活動や写経の会などの定期的な会合の場を持っており、秋美愛はこうした小グループにもこまめに接触し集票組織に組み入れてきた。

その他にも、姑をはじめ夫の親族が熱心な円仏教信者であったことにより、地域の円仏教教団を中心に太いパイプが形成された。男女の権利平等などの綱領を掲げる円仏教としては、女性候補の秋美愛は選挙支援を行う名分の立つ候補者であった。秋美愛の後援会には円仏教幹部が多数出席し、秋美愛を支持しているという明確なシグナルを出席者たちに示した。これらの仏教団体は、秋美愛の選挙運動に対する財政的援助も行っており、女性候補が直面しやすい政治資金の不足を解決する一助ともなった。

新たに済州道人脈を開拓したことは集票に大きな力となった。秋美愛が任期中に「済州 4.3 特別法」を発議、立法化したことにより、済州道出身

者の秋美愛に対する評価は極めて高かった。済州道議会からは済州道名誉道民証を授与され、済州 4.3 事件民間人犠牲者遺族会は秋美愛の「後援会の夕べ（政治資金集めのパーティー）」に出席するために集団で上京した。選挙区内の済州道出身者もまた、後援会の夕べや議政報告会、党员教育に多数出席し、集票に協力した。済州道人脈は秋美愛が自らの政治的力量で開拓、獲得した政治資源である<sup>(23)</sup>。地縁より優位に立つ「縁」が確保されれば、その団体および成員が候補者個人の強力な支持基盤となる可能性が高まるといえよう。

### おわりに

以上みてきたように、民主党候補者の秋美愛の事例では、選挙運動組織は「地縁」を媒介とする運動員と、「地縁」とは無関係に利益を媒介とする運動員から構成されていた。前者の運動員が秋美愛の集票組織へ参加した理由は、自らの出身地域の集団的利益への関心ゆえであった。それに対し後者の場合は、個人的な利益の追求という側面がより強くみられた。それゆえ候補者から利益を得られないと判断すれば、集票組織から離脱する恐れがある。候補者は選挙に勝利するため両者のグループをバランスよく配置し、必要に応じて利益を与えることで、安定した集票基盤を築いていかなければならない。秋美愛の場合、全羅道出身者を選挙運動の中核としながら、全羅道出身者以外の人材をも確保し、個人や団体の支持を育成、拡大し、独自の支持基盤を築いたことが、第 16 回国會議員選挙における勝利を確実にしたといえる。

その後、2004 年の第 17 回国會議員選挙で秋美愛は落選の憂き目にあった。敗因の理由はいくつかある。民主党は大統領の弾劾に賛成したことにより強い逆風にさらされた。さらに弾劾をめぐりハンナラ党と協力したことは、全羅道出身者たちが民主党および秋美愛支持から与党ウリ党候補へと支持を乗り換える格好の口実をもたらした。民主党が分裂しウリ党が結成された頃から、既に全羅道出身者たちの間では支持の対象をめぐる葛藤が引き起こされていた。政界を引退した金大中は

全羅道出身者に対する影響力を既に失っており、また、政権与党の候補者ではなく、党分裂により弱小政党となった民主党の候補者であった秋美愛には、以前ほど利益を誘導する力はなかった。つまり、秋美愛を支持することで利益を得ようとする人々を集票組織に引き込む誘因は低下していた。それにもかかわらず、全国的知名度に安住した秋美愛は、地盤固めや集票組織の維持形成を疎かにしてきた。さらに選挙公示後は民主党選挙対策委員長として多忙を極め、選挙区に顔を出すこともままならず、地区党は閑散としていた。

全羅道出身者たちの秋美愛に対する支持は、金大中の代理人であったゆえであり、金大中という後ろ盾を失った秋美愛はもはや全羅道出身者たちの支持を引きつけることができなかつたことを今回の一連の選挙結果が物語っている。

第17回国会議員選挙では、当選者の6割が新人議員であった。かつてないほど現職議員の落選が増加したのは大統領弾劾が最大の選挙イッシューとなつたためといえるが、選挙民の変化を読み誤り、集票基盤の形成、維持を疎かにした現役の国会議員の政治的姿勢もその一因となつたと思われる。韓国政治がどのように変化するのかは今後の展開を見極めなければならないであろうが、三金時代には可能であった地縁を媒介とした集票活動は、今後は以前ほど有効に機能しないであろう。候補者は独自の支持基盤を形成することが今まで以上に強く求められるであろう。

- (1) 詳しくは日本政治学会年報『政治学「性」と政治』(2003) を参照されたい。
- (2) 第13回から第15回国会議員選挙において初当選議員が当選者に占める比率は、平均47.3%と過半数近くを占めている。
- (3) 地域感情は首都圏の場合でも、全羅道や慶尚道出身の有権者の投票行動を規定する傾向が強く見られた。詳しくはパク・チャンウク(1996:37)、韓国ギャッラップ(1997:183)を参照されたい。
- (4) 第15回国会議員選挙の場合、候補者の職業別比率は、政治家・政党員が最も高く、続いて実業家、法曹、言論、官僚の順であった。当選者は、政治家・政党員、法曹、言論、官僚、実業家の順であった。詳しくは春木(2003)を参照されたい。
- (5) 主要政党の候補の出身地が各党の主要基盤と一致し

ない(チョン・ヨングク 2003:217)事例は少なくない。

- (6) 徐盛煥との面接調査、2000年4月8日。
- (7) 秋美愛陣営は2000年の時点で、広津区乙全体の全羅道出身者の比率は約3割強、忠清道は2割弱と推定していた。
- (8) 第15回国会議員選挙において、全羅道出身者が4割を占めるといわれた九老区や冠岳区の選挙区(「ハンギョレ21(ハンギョレ新聞社)」1996年4月25日号:23-24)で国民会議の公認候補が落選した例が示すように、非全羅道出身者の票をどれだけ上積みできるかが当落を左右するといえる。
- (9) 2000年2月16日、公職選挙法第87条が改正され、社団・財団などの名称にかかわらず、労働組合および候補者を招請し対談や討論会を開催できる団体は、公職選挙法上許される範囲内で選挙運動を行うことが可能となつた。
- (10) Aへの面接調査、2000年3月31日および4月2日。
- (11) 他の女性候補者の事例を見ても、同様のことがいえる。例えば東大門甲区で民主党公認候補として出馬、当選した金希宣議員の夫は、忠清道郷友会(夫は忠清道出身である)を動員し、集票活動を行つた。金希宣議員との面接調査、2001年10月19日。
- (12) Lとの面接調査、2000年3月15日。
- (13) 例えば広津区甲ハンナラ党候補の金榮春は、支持者を中心に各洞に山岳会を組織し、それぞれ会長を任命した。金榮春はこまめに山岳会に参加し、親交関係を結んできた。選挙時にはこれらの山岳会の会員が集票組織の中核としてフル稼働した。このような形の山岳会は候補者独自の後援組織であるため、候補者が変われば消滅する。金榮春との面接調査、2002年3月14日。秋美愛の対立候補である柳俊相もまた山岳会を組織し、後に山岳会の会員が選挙運動の中心的運動員となつていた。
- (14) Mとの面接調査、2002年3月29日。
- (15) 例えばPは、秋美愛が当選を果たし、秋美愛や地区党幹部からその貢献が認められたことに対し、人生でこんなに満足したことなく、自分に対する自信感を得たと語っている。Pとの面接調査、2001年3月15日。
- (16) Aとの面接調査、2001年3月17日。
- (17) 同上。
- (18) 東大門甲の金希宣民主党候補、京畿道高陽市一山区甲の鄭範九民主党候補の場合も同様であった。
- (19) 第17回国会議員選挙において、広津区乙の8つの湖南郷友会が秋美愛ではなくウリ党候補の支持に回ったのがその証左である。
- (20) 地方では、同じ姓氏の血縁集団が分裂する事例もみられる。例えば、オクチョン趙氏はスンチョンの選挙区では最大の姓氏であった。第15回国会議員選挙では、同じ門中同士が、一方は自民連候補、一方は無所属候補として同じ選挙区から立候補したため、門中が分裂する

形で選挙支援が行われた。

(21) 任鎮出議員への電話インタビュー、1999年8月19日。

(22) 例えば、広津区甲ハンナラ党候補の金榮春の事例では、選挙区内にある天主教聖堂の神父のもとに3年かけて通い、神父の信頼を得るようになった。金榮春は神父やその信者たちからの全面的な選挙協力を得たことが集票に大きな力となったと述べている。金榮春議員との面接調査、2002年3月14日。

(23) 全羅道出身者の多くが民主党の没落や大統領の弾劾を理由にウリ党候補者の支持に回るようになったのは対照的に、済州道出身者たちは秋美愛を高く支持し続けた。朝鮮日報が大統領弾劾案可決後に広津区乙の選挙民を対象に行った調査によれば、秋美愛に対する支持率が最も高かったのは、済州道出身者であった。秋美愛の支持率は、済州道出身者が46.5%、全羅道出身者は34.5%であった。<http://www.chosun.com/2004年3月22日>。

〔付記〕本稿執筆に際し、匿名の査読者から示唆に富んだたいへん有益なコメントをいただいた。ここに記して深謝申し上げたい。

#### 〈参考文献〉

##### （韓国語文献）

- イ・ウォンウン（1992）「国会議員選挙事例研究 1992 大邱直轄市中区」現代社会問題研究所編『国会議員選挙事例研究：第14代国会議員選挙1992』ソンナム。  
イ・ガビュン（1990）「投票行態と民主化」キム・グアンウン編『韓国の選挙政治学』ナナム（167-181）。  
イ・ガビュン／イヒョヌ（2000）「国会議員選挙における候補者の要因と影響力——第14～16代総選を中心に」『韓国政治学会報』34(2)：149-170。  
キム・ウク（1999）「居住地の規模と年齢が投票行動に及ぼす影響」チョ・ジュンビン編『韓国の選挙III——1998

年地方選挙を中心に』ブルンキル、207-248。

キム・グゥアンス（1990）「縁故主義と政治的選択行為」ムン・ソンナム編『地域社会の縁故主義：血縁、地縁、学縁の関係網と実態』日進社、49-85。

キム・ジョンナム／イ・ナミヨン（1997）「投票者たちは候補者をいかにして選択するのか」韓国議会発展研究会編『議政研究』ハンウル社、156-201。

チョ・ギスク（1996）『合理的選択——韓国の選挙と有権者』ハンウル。

チョン・ヨングク（1992）「国会議員選挙事例研究 1992 ソウル特別市江南甲区」現代社会問題研究所編『国会議員選挙事例研究：第14代国会議員選挙1992』ソンナム。

チョン・ヨングク（2003）『韓国の政治過程』ペクサン書堂。

パク・チャンウク（1993）「第14代国会議員総選挙における政党支持の分析」李南永編『韓国の選挙I』ナナム、67-115。

パク・チャンウク（1996）「第15代国会議員総選挙結果概観——選挙後有権者の面接調査資料を中心に」世宗研究所編『第15代選選分析』世宗研究所、17-61。

ムン・ソンナム（1990）「地域社会と縁故主義」ムン・ソンナム編『地域社会の縁故主義：血縁、地縁、学縁の関係網と実態』日進社、9-47。

##### （日本語文献）

- 服部民夫（1992）『韓国——ネットワークと政治文化』東京大学出版会。  
春木育美（2002）「民主化後の韓国におけるポリティカル・リクルートメント」『アジア・アフリカ研究』アジア・アフリカ研究所：72-91。  
春木育美（2003）『韓国における国会議員の誕生過程——ポリティカル・リクルートメントと集票構造』同志社大学大学院文学研究科社会学専攻博士論文。